

モンゴル族の民間における口承文芸の名称について

Folk terminology of oral tradition among the Mongols

斯 琴

SIQIN

要旨 本論は、地域的な視点からモンゴル口承文芸の問題を検討する。すなわち、アラシャ・モンゴルのことを取り上げて、伝承者の生活実情に密着して口承文芸を採録し、このように採録した伝承のテキストを分析して、現代社会における口頭伝承の有り様を考察する。こうしたアラシャ・モンゴルの口承文芸の全体像を捉える中で、民間における伝承者自身による口頭伝承の名称を重視し、それを検討することによってモンゴル口承文芸のジャンル問題の解明に努める。このことによってモンゴル口承文芸の復元もしくは再構築にアプローチする。このアプローチを通して、モンゴル口承文芸がユーラシア諸民族における口承文芸の有り様と如何なる関連をもつか問いたい。

1. はじめに

口承文芸は民間の口頭伝承によって生きてきた文化であるため、その担い手である民衆による名称にはもろもろの可能性が温存されている。すなわち、民衆の生活環境は常に変わり動くので、その中で日常生活の交流は自然に行われている。特に、このような交流によって思いをつづる伝承や言葉は空間にも時間にも限らず伝わりひろまる。こういう意味でモンゴル口承文芸のジャンル名称を考える上で、その多様な下位集団、ひいては集団の構成経緯を考慮し、その人たちに語り継がれる口承文芸の名称を考察することは重要である。

1) モンゴル族の源流

モンゴル族は匈奴と東胡語族¹に起源をもつと言われている。つまり匈奴はモンゴル高原での支配権を失ったとき、東胡語族の鮮卑族は入れ替わって支配力を広げ、鮮卑族には匈奴の余種の残留する者が入り混じって合流した。そのときモンゴル族はまだ出現していなかった[Liu jin suwe1985 : 1]。

モンゴル族の源流は大ざっぱに言えば、その中心集団の祖先は上記の東胡語族に所属する。7 世紀にモンゴル族の中心集団の祖先はアムール川の上流である黒竜江の源流にあたるエルグネ川の流域に暮らしていた [Boduqai 1986]。8 世紀にこの集団は西へ移動し、ヘンディ山に辿りついた。当時、アルタイ山脈以東、大興安嶺以西、万里の長城以北、バイカル湖以南の空間には匈奴と東胡語族の混合した者、それからチュルク系語族が暮らしていた[Liu jin suwe 1985 : 2]。

11～12 世紀にモンゴル族の中心集団の先祖は万里の長城に沿ってフルンブイル湖からアルタイ山脈までの空間で暮らし、ステップの民と言われていた。これ

¹ 引用文献によれば歴史上の語族名。

に対して、森林の民と呼ばれる集団があった。これにはバルグト（ブリヤトを含む）²・ウリヤンハイ・オイラトと呼ばれる下位集団が含まれていた。彼らは主にバイカル湖およびイルティシ川の上流で暮らしていた。

したがって、13 世紀の当初、チンギス・ハーンはステップの民と森林の民といった諸集団を統一して大モンゴル帝国を建国した。そこで、匈奴と東胡の合流部、チュルク系語族に属するケレイト部とナイマン部もその支配下に置かれた。それらを総称して「モンゴル人」と呼んだ[Liu jin suwe1985 : 2]。

2) モンゴル族の下位集団

モンゴル族の中に多様な下位集団が存在する。それらの集団は歴史的に東のアムール川の上流から西のヴォルガ川までの広範囲にわたって集団移動をしたのであって、現在のモンゴル族はユーラシアにおいて東西に広く分布している。

モンゴル帝国ないし元朝以降、モンゴル族はゴビ砂漠を隔てて、それぞれ南モンゴルと北モンゴルと西モンゴルと呼ばれた。この分離は地理上おおざっぱに現在の中国内モンゴルと新疆自治区の一部とモンゴル国に当たる。

南モンゴルと北モンゴルは一緒に東モンゴルとも言われる。また、北モンゴルはハルハとも呼ばれる。東モンゴルは主にモンゴル族の中心集団から構成されている。つまり、エルグネ川流域に源流をもつ諸親縁集団がモンゴル族の中心集団を成した。こうした中心集団の後裔は現在の中国内モンゴルとモンゴル国に広がっている。16 世紀以降、バイカル湖の周辺に暮らした森林の民に属するバルグド（ブリヤトも含む）がエルグネ川・セレンゲ川流域に広がってきた。そのため、現在の内モンゴルのフルンブイル地域とモンゴル国の北部に一部のバルグ人とブリヤト人が住んでいる。

西モンゴルはオイラト・モンゴルとも呼ばれる。その起源は主に 12 世紀にバイカル湖からイルティシ川までの地域に暮らした森林の民である。この森林の民に属するオイラトはアルタイ山脈に源を持つイルティシ川の上流域に居住し、数多の下位集団で構成された。彼らは森林の中で狩猟生業を営んでいた[A. Tümen 1999 : 33]。

オイラトはモンゴル帝国の統治下に入ってから天山南北麓に活動した。元朝以降、オイラト・モンゴルの勢力が強大になり、さらに多くの氏族が出現した。その中で、森林の民に属する旧オイラトを凌いだチョロース（ジュンガルとドゥルベトを含む）、トルグート、ホシュトなどの氏族集団が中心になった。

チョロース氏族は 13 世紀のナイマン部に起源する。後にこのチョロース氏族は旧オイラトを統一して、オイラト・モンゴルの中で指導的な立場になって、ジュンガル帝国の中心となり、オーロト（ögeled）と呼ばれることもある。その後裔は現在中国新疆自治区の伊犁川流域を中心として暮らしている。

こうしたチョロース氏族に比べて、トルグートとホシュト氏族はオイラト・モンゴルの新しいメンバーである。すなわち、トルグート氏族は 13 世紀にチンギス・ハーンのモンゴル帝国に治められたケレイト人の後裔であり、16 世紀にオイ

² バルグの複数形、バルグ人をはじめとするいくつかの集団をまとめてさす名称。その中にブリヤト人の集団も含まれた。

ラトのメンバーとなった。その子孫は一部がヴォルガ川流域に移動し、カルムイクと呼ばれている。一部が現在主に中国の新疆自治区ホブクサイルそして内モンゴルのエズネ旗などに居住している。

ホシュト氏族はモンゴル族の中心集団に源をもつ。すなわち、13世紀にエルグネ川流域はチンギス・ハーンの弟であるハブト・ハサル（ハサガ）の領地であった[Burjigin Dorgi 2002 : 5]。15世紀前半にハブト・ハサルの第8代の子孫は一部の民を連れて西へ移動して天山の麓に至り、当時のオイラト・モンゴルと合流した。この第8代の子孫が後にホシュト氏族を構成し、オイラト・モンゴルの一員になった。このホシュト氏族は17世紀に現在の新疆と青海そして内モンゴルのアラシャ地域へ分離した。

2. アラシャ・モンゴルの口承文芸

本稿では中国内モンゴルのアラシャ地域が調査対象になっている。筆者は2002年から内モンゴルのアラシャ地域でモンゴル口承文芸のフィールドワークを続けてきた。本稿ではアラシャ・モンゴルの口承文芸を取り上げて、フィールドワークで得られた資料を分析することによって、伝承者の民間におけるモンゴル口承文芸のジャンル名称の問題を考えたい。

1) 調査地域について

アラシャ地域は内モンゴルの西端に位置し、行政区分上アラシャ盟と呼ばれる。2003年の人口調査によると、アラシャ盟の総人口は約18万人、そのうちモンゴル人は約5万人（アラシャ左旗は4万人弱、右旗は約7千人、エズネ旗は約5千人）である。

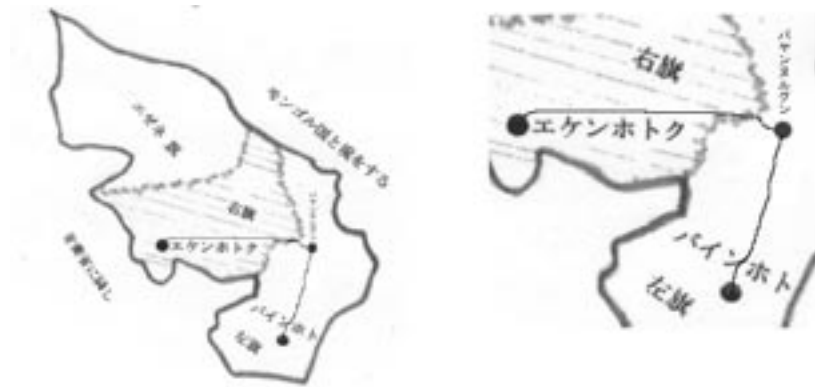
アラシャ左旗と右旗は、かつては「アラシャ・ホシュト・オーロト旗」[Burjigin Dorgi 2001 : 119]という一つの旗であった。そして近隣のモンゴル人からは、「アラシャ・モンゴル」や「アラシャ人」と呼ばれてきた。しかし、そのアラシャは1961年に、左旗と右旗に二分された。なお、エズネ旗の主要な居民はトルグート・モンゴルであるため、トルグート旗と呼ばれてきた。このトルグート旗のモンゴル人はエズネ・トルグートと呼ばれている。アラシャ・ホシュト・オーロト旗とトルグート旗は歴史上異なるルートでアラシャ地域に移ってきたため、二つの特別な旗として扱われた。それが1980年にまとめてアラシャ盟になったのである。筆者はアラシャ左旗と右旗のモンゴル人の社会とその文化、特に口承文芸を研究対象としている。本稿では特に説明がなければ、「アラシャ地域」と使用した場合は左旗と右旗のことを指す。

アラシャ地域へ移動してきたオイラト・モンゴルにはホシュト氏族を中心に、いくつかの異なる集団の人が集まっていた。アラシャ地域に移住したオイラト・モンゴルをアラシャ・モンゴルという習慣があるが、アラシャ地域に近隣のハルハやオルドスから移住したモンゴル人も多少存在するため、ここでは、アラシャ・モンゴルという名称は広義に扱いたい。

筆者は大学院修士課程の研究からアラシャ地域でフィールドワークを行いながら、何人もの語り手から伝承の採録をしてきた。フィールドワークはアラシャ右旗と左旗の境に位置するバヤン・ヌルグンを出発点に、その次に右旗そ

して左旗へという形でフィールドワークを展開することを計画した。こうしたフィールドワークのなかで、人々の生活の実情やものの考え方などを把握することができた。調査のルートは以下になる。

図 1～2
調査ルート



2) アラシャ・モンゴルの生活実情

筆者は主に語り部としての長老たちを訪ねてフィールドワークを行った。現地調査は口承文芸の採録を中心にした。そこで生身の語り手たちの精神世界や心の喜びが分かった。一昔前の彼らの生活において、口承文芸は本当に重要なものであった。そうした環境で育てられた長老たちは自らの生活を楽しんでいる。その様子は次のような何人かの生活現状からも伺われた。

①アラヒチ氏 女性 82歳

アラヒチ氏はとてもおしゃべりな人であり、若いときたくさん伝承を覚えたという。アラヒチ氏はゲルに住みながら昔からの生活世界を維持してきた。筆者がアラヒチ氏を訪ねたとき、氏の家族は家に住んでいたが、氏は一人でゲルの生活をしていた（写真1～2）。



写真1



写真2

氏は若者の振舞いを遠慮なく指摘するようだ。扉の端にしゃがんでノートをとっていた筆者を見て、「あなたの座り方はおかしいわ。モンゴル人ならそのように座り方をしないのよ」と注意した。そして、「現在の若者の行為が乱れ、よくタブーを犯すのだ」と話していた。アラヒチ氏は筆者にルスの話や仏の話などを語ってくれた。氏は昔話の世界を信じているようだ。二時間く

らい伝承を語ってから、いったん中止し、マニイン・マグタル³を吟誦しはじめた。この吟誦はまた素晴らしい口承伝承であった。毎日この時間帯ではマニイン・マグタルを唱えるという。このように、アラヒチ氏は伝統文化の世界を維持しながら、口承文芸を楽しんで豊かな生活を過ごしている。

②サムタン氏 男性 72歳

サムタン氏は、文字の読み書きができ、絵画と大工仕事が得意である。サムタン氏は、子供のころ隣のウリジ・ホトクという人に伝承の語りを教わった。お正月や集まりのとき、伝承を語って人気のある語り手になった。

サムタン氏は田舎の生活に馴染み、たまにしか町に住まない。田舎でラクダの乳でつくったヨーグルトを食べ、ザグ⁴を燃やすゲルの暖かい生活が最高だという。こうした生活の中でサムタン氏は彫刻や絵画などを楽しんだり、祭りなどに招かれ口承文芸を語ったりしている。

③スンプレ氏 女性 84才

スンプレ氏は、牧畜業に携わり生涯を暮らしてきた。文字の読み書きは出来ないのだが、家で両親から伝統的な厳しい教育を受けた。その教育の一つは、仕事が終わってから家で口承伝承を語って聞かせることであった。スンプレ氏は、現在の親たちが子供に伝承を語って聞かせないことは嘆かわしいという。

上記の長老たちの生活様式から分かるように、人々の生活世界は文化的意味をもつ。口承文芸はまさに伝承文化の一部であり、そこにその文化をもつ人たちの精神世界が描かれている。口承文芸の語り手またはそれを楽しむ人たちの日常行動の背後にその文化の世界がある。これらの長老たちが牧畜生活の中で、世代から世代へ伝承を担い、その文化的意味をもつ世界で人間と人間、人間と自然との付き合いを行ってきたのだ。

3) 採録資料の分析

筆者は現地調査で 87 話の伝承を採録した。採録の資料は次の表 1 に示す。表 1 を説明すると、1～87 整理番号は後のジャンル分類に扱うものである。さらに、分かりやすくするために語り手にも①～⑯まで番号をつけて表した。その次は採録の話の内容を簡単にまとめた。語り手の名前は以下の通りである。①バトムンヘ ②ハダ ③モウ・オユンビリゲ ④ジューバイ ⑤オユンダリ ⑥ドルマソウ ⑦ビリグダライ ⑧シャラドウドウ ⑨サンジェ ⑩スンプレ⑪ノルジマ⑫サマタン⑬トゥブジラガラ⑭ウジム⑮エレデンバートル⑯オソル

表 1

整理 番号	語り手 (番号)	内 容
1	①	橈骨が息子を助ける話
2	①	橈骨のおかげで家族が無事に再会する話
3	①	橈骨が夫に化けた鬼を暴く話

³ 経文の讃詞。

⁴ 一種の燃料。

4	①	アボ領主と清朝皇帝の姫、緑の占い師とヒツジの肩甲骨
5	①	人間の生け贄でオボーを祭って戦いに赴く話
6	①	シャラガ寺の縁起
7	①	回族の緑の塔と白い塔とアラシャ・モンゴルのオボー
8	①	ハラ・モリト・イン（黒馬）・オボーとブルガスタイ寺
9	①	ハラ・モリト・イン（黒馬）・オボーと家の幸せ
10	①	税金が免除された金持ち
11	①	アラシャ・エゼエン（アラシャ仏）
12	①	モニ・ウーラ（山）の移動
13	①	金子馬と子牛(ジラタイ塩湖)
14	①	金矢を握り、回族を治めた話
15	①	シレート・メルゲン・ハーン・ネ・ウリゲル（英雄の話）
16	①	泥棒の兄弟
17	①	ロヴンチンブイン仏が狐の妖怪を治めた話
18	①	ベレゲ・ホソムという鳥
19	①	禿鷹の胃
20	①	禿鷹がジェリ（鹿に似た動物）を捕まえる話
21	①	禿鷹の尿が薬のかわりに、難病を治した話
22	①	黒牛の角が割れ、禿鷹の卵が凍る寒い冬の話
23	①	大みみずくの鳴き声
24	①	「アラタン・ハラツェ」（金燕）
25	①	姑と花嫁
26	①	清朝皇帝に牛の皮一枚の地面をもらいアラシャに移住する話
27	③	アラシャ領主、姫を花嫁にもらい、アラシャ領地を得る話
28	③	ラクダに乗った客
29	③	骨人（骸骨）
30	③	乗馬した人たち
31	③	兄弟二人が九つの宝を捜す話
32	②	兵士と婚約者
33	②	花嫁が野宿し、夜中、鬼たちの会話を聞いた話
34	②	ある者が町に行く途中鬼に出会った話
35	②	井戸の道に見えたお客
36	②	緑の湖の怪談
37	③	チンギスという名の由来
38	③	ロヴンチンブと狐の妖怪
39	③	蛇の巣に入って天上の世界に行ってきた話
40	③	鬼が歌を歌って通りかかる話
41	③	アラシャ仏の由来

モンゴル族の民間における口承文芸の名称について（斯琴）

4 2	④	ドシギン・ハラ・バートル （英雄の話）
4 3	⑤	バヤン・バラグ
4 4	⑤	シリングラジュ・バートルとアジグ・テネグ・バートル（英雄の話）
4 5	⑤	ショルグルジン・メレゲン・ハーン （英雄の話）
4 6	⑤	少年がマンガスと人食いを退治した話
4 7	⑤	貧乏な少年と王女
4 8	⑤	ガラジャとマラジャ
4 9	⑤	人食い娘
5 0	⑤	幸せと不幸せ
5 1	⑤	狩人の不幸
5 2	⑤	エレケ・メレゲン・ハーン（英雄の話）
5 3	⑤	兄弟
5 4	⑤	兄弟三人
5 5	⑤	パダイン・ジラン砂漠
5 6	⑤	フィル帽子の息子
5 7	⑥	ザガスネ・ウリゲル
5 8	⑦	兄弟が仲直りした話
5 9	⑦	魔術を覚えた話
6 0	⑦	兄弟七人
6 1	⑦	北斗七星
6 2	⑧	ガラダマ（人間の生け贄で旗を祭って戦いに赴く話）
6 3	⑧	グナン・ハラ・バートル （英雄の話）
6 4	⑧	ケレデ・メレゲン （英雄の話）
6 5	⑧	パダイン・ジランのルス
6 6	⑧	エズネ旗のオボー
6 7	⑧	ウンドゥル・アラシャ
6 8	⑧	ウデ・モド（木）
6 9	⑨	ポートゴル
7 0	⑨	ホンゴルジュラ
7 1	⑨	エレン・サイン・トドホネ・メルゲン
7 2	⑩	ドシギン・ハラ・バートル（英雄の話）
7 3	⑩	ナラハザトの仏
7 4	⑩	祖父の死の話
7 5	⑪	七才のドシギン・ハラ・バートル（英雄の話）
7 6	⑪	ハザル・ハライン・ハブハン・ソヨ（主人公の名前）
7 7	⑪	三才のグナガン・ウラン・バートル（英雄の話）
7 8	⑪	王子と貧乏な少年
7 9	⑪	人食い

8 0	⑫	ホルムスタ・ハーン（キーノミーン・エキ）（英雄の話）
8 1	⑬	牛の皮一枚の地面
8 2	⑬	アラシャに雨降らなくなったわけ（アラシャの主が盗まれた）
8 3	⑬	1948年、蛇がいなくなった話
8 4	⑭	大蛇が天へ上って行った話
8 5	⑮	アラシャ・エゼンが訪れた話
8 6	⑮	グルテムが降りる（神が憑依する）過程を見た話
8 7	⑯	鏡に照らし髪を梳かす女

こうした採録の伝承には次のような内容が見られる。

- ① 神仏に関する話（資料：11・38・67・85）
- ② 歴史人物や地名の由来に関する話（資料：4・5・6・7・14・17・18・26・27・41・55・62・66・68・69・73・81）
- ③ 不思議な力が主人公を助ける（資料：1・2・3・12・24・31・32・37・39・43・46・47・48・49・53・54・56・57・59・60・61）
- ④ 生活実際に密着する話
 - A. 実際の生活の出来事（資料：21・25・40・50・51・58）
 - B. 知恵をめぐる話（資料：16）
- ⑤ 勇者が不在のとき、故郷がマンガスに襲われる。勇者がマンガスと戦い、家族と故郷を守る。（15・42・44.63・64・72・75・80）
- ⑥ 勇者が旅の途中、障害となるマンガスと戦う。（45・52・71）

こうした内容から考えれば、アラシャ・モンゴル人がウリゲルと呼ぶ伝承には神話、伝説、昔話、英雄叙事詩といった上位分類のジャンルができると考えられる。したがって、下位分類も見られるのである。このような考えを表で示して、その伝承の特徴を取り上げると次のようになる。

表 2 採録資料の特徴

上位分類	下位分類 (1)	下位分類 (2)	特徴
神話 ①			主題：神仏や起源神話など。 登場者：アラシャの主、仏 時間：大昔、昔
伝説 ②			主題：歴史人物や地名や習俗に関する話 登場者：歴史人物（アラシャ王と后）
昔話	魔法昔 ③		主題：見えぬ所で不思議な力が主人公を助ける。人間と異界（他界）の者との交流。 登場者：王（王女）、平民（爺と婆と息子）、天上の仙人、妖怪、ルス（姫） 時間：昔々

	現実譚 ④	A. 現実生活の出来事 B. 知恵譚 C. 世間話 D. 経験譚	主題：神通力等不思議なものでなく、現実的な話。昔の生活を反映する現実的な出来事。 登場者：ある者、筆者 時間：昔、ある日、1956（はっきりした日にち）、
英雄 叙事 詩	本格英雄 叙事詩 ⑤		主題：勇者がマンガスなどの敵と戦い、家族や故郷を守る。 登場者：ハーン、メルゲン、バートルなどの勇者とその家族、王と姫、勇者の仲間、マンガス 時間：大昔
	周辺英雄 叙事詩 ⑥		主題：勇者が旅の途中、障害となるマンガスと戦う。 登場者：ハーン・メルゲン・バートルなどの勇者とその家族、ルスの姫や王の姫、勇者の仲間、マンガス 時間：大昔

上記の分析を踏まえて、筆者は現地調査で内モンゴル・アラシャ地域の伝承者がさまざまなジャンルの伝承をウリゲル（üliger）と呼んでいることを明らかにした。このウリゲルという伝承には、神話・伝説・昔話・英雄叙事詩などが含まれている。

3. ウリゲルについて

1) ウリゲルの現象

モンゴル口承文芸研究では、伝承者のレベルでウリゲルと呼ばれる伝承に具体的にどのようなものが含まれるかについて未だ詳細な研究がないといって過言ではない。たとえば、モンゴル語で物語を語ることを一般的に「üliger kelekü」という。「kelekü」は語るという意味の動詞である。この場合のウリゲルは概念範囲がはっきりしない。筆者は調査の際、「ウリゲルを語ってくださるか」と聞いたとき、上記のような多様な内容が語られたのである。したがって、アラシャでは例のような多様な伝承を語る行為に対して「üliger kelekü」という一般的な言い方をするのは明瞭である。そうした語り行為には、散文語りの神話・伝説・昔話のほか、英雄叙事詩の語りも含まれている。筆者の採録した資料には韻文形式の英雄叙事詩・韻文と散文を入り混じった旋律で演唱する英雄叙事詩・散文形式の英雄叙事詩が含まれている。

① 韻文形式の英雄叙事詩

筆者は2004年にジョーバイ氏によって「ドシギン・ハラ・バートル」というウリゲルを採録した。ジョーバイ氏はオイラト系のモンゴル人である。氏は昔この伝承を、旋律を持って演唱し、子供たちを楽しませていたという。この伝承は韻文形式と散文形式が両方存在する。韻文形式は氏の末の娘ウジム氏が記録したもので、散文形式は筆者がインタビューしたとき、語り手が高齢のため末の娘からヒントをもらいつつ、散文で「ドシギン・ハラ・バートル」の粗筋を語ってくれたものである。

②韻文と散文が入り混じり、旋律で演唱する英雄叙事詩

筆者は2005年の調査でオイラト系の語り手であるサマタン氏によって「キーノミーン・エキ」というウリゲルを採録した。この伝承は韻文と散文が混在し、独自の旋律で演唱される。

③散文形式の英雄叙事詩

散文形式の英雄叙事詩は5人の語り手から7話採録した。それは、「sili-yin yaljayu bayatur bolun aĵinai teneg bayatur」、「ġunan qar-a bayatur」、「keriyedei mergen」、「doluġan nasutai doġsin qar-a bayatur」、「ġunan ulayan bayatur」、「doġsin qar-a bayatur」、「siregetü-yin mergen qayan üliger」がそのタイトルである。この5人の語り手はそれぞれオイラト系、オールドス系、ハルハ系のモンゴル人である。言い換えれば、この語り手たちは祖父母あるいは父母がオイラト人かハルハ人かオールドス人となる。その人たちはアラシャに移住したため、この語り手たちはアラシャで生まれて育てられた。彼らは祖父母や父母からたくさんのウリゲルを聞いて育った。その中に、いくつかの英雄叙事詩が含まれている。これらの伝承は散文形式の中に韻文形式の定型句が見られる。そして、この定型句はこれらの英雄叙事詩の間に交互に現れる。このことから考えれば、これらの伝承はもともと韻文形式を持っていたと思われる。

上記を踏まえて考えるならば、アラシャ地域において「üliger kelekü」という言い方から語りの内容である「üliger」にも、語り行為の「kelekü」にも多様性が推測できる。そして、この多様性の中に、英雄叙事詩が含まれることは明らかである。

果たして、このようなウリゲルの現象はモンゴル口承文芸全体においてどのような意味を持つであろうか。以下、先学の業績を取り上げて考察する。青海モンゴルでは叙事詩の演唱を「üliger kelekü」（また tuuji kelekü）という[薩仁格日勒 2001：302]（ただし ikil という楽器を伴って語る場合 yangnan-a あるいは yangġinan-a ということもある）。また、新疆オイラト・モンゴルでは伝承者がジャンガルの演唱に「ġingyar kelekü」という表現を用いる。この場合の「ġingyar」は英雄叙事詩『ジャンガル』を含む多彩な伝承の意味をもつ[D.塔亜 2001：3]。したがって、当然のことながら「kelekü」にも多様な語りのスタイルが含まれる。内モンゴルの東部では二胡を伴うフリン・ウリゲルの語りを「quġur-un üliger kelekü」という。ここでは、楽器を伴う語りのスタイルを「kelekü」という動詞で表している。さらに、モンゴル国において、南ゴビ県・東ゴビ県・中ゴビ県の調査で語り手が叙事詩の演唱について「üliger kelekü」という表現を用いることが確認できた[Ĵa.Čilayu 1989：2～3]。

そのほか、「kelekü」という語については、ユルール（irügel 祝詞）などの韻文を唱えることをも「irügel kelekü」と表現する。つまり、「kelekü」という語で、散文語り、韻文の唱え、旋律をもつ演唱などの語りの行為が表現されることがモンゴル全地域で多く見られる現象である。

上記を踏まえれば、アラシャ地域の「üliger kelekü」という言い方で英雄叙事詩の演唱を含む多様な口承文芸の語りが表現されることが、珍しいことではない

と考えられる。

2) ウリゲルとトゥーリの名称について

モンゴル口承文芸の研究では叙事詩のジャンルはトゥーリという学術用語が用いられているが、このジャンル名称についての研究はまだ進んでいない。「英雄叙事詩」にあたるモンゴル語 “*батырлиг тууль*”（バートルリグ・トゥーリ）は “*героический эпос*” の訳語で、学術用語として作られたという[上村 2001 : 79]。ここでは口承文芸の地域研究の視点から、民間の伝承者における叙事詩ジャンル名称について考えてみたい。

これまでのモンゴル口承文芸研究では、学術的に「トゥーリ」(tuuli) と「ウリゲル」(üliger) という二つの大きなジャンルに分類されているが、その概念は伝承者のレベルと研究者のレベルで一致するとは必ずしも言い切れない。そこで、モンゴル各地域におけるトゥーリ (tuuli) とウリゲル (üliger) という名称に見られる口承文芸のジャンルの概念を考察する。

まずは、これまでの研究者たちの調査を取り上げてみよう。

I SH・ガダムバによる

ジャンル名 地域名称	トゥーリ (tuuli, 叙事詩)	ウリゲル (üliger, 昔話)
ハルハ（モンゴル国）	tuuli	üliger
ブリヤト	üliger	ongtoq-a
カルムイク	utu üliger	tuulis
内モンゴル		utu tuulimad

II ダミリンジャブによる

ジャンル名 地域名称	トゥーリ (tuuli 叙事詩)	ウリゲル (üliger 昔話)
バイカル湖ブリヤト	üliger	
フルンブイル・ブリヤト	teüke	
フルンブイル・パルグ	üliger	
ハルハ（モンゴル国）	üliger 或 tuγuǰi	yabayan üliger
新疆殆どのモンゴル地域	jingyar	teüke
新疆伊犁等	jingyar	tuuli

III その他

i ジャムスルン・ツェワン（モンゴル国）は『モンゴル英雄叙事詩ノート』（1914）のなかで「ウリゲルにはバートルの戦いの物語が旋律を伴って演唱される。それは狩猟や病氣治療などで演唱される」と書いているが、その概念はトゥーリに当てはまるのであろう。

ii ハルハ（モンゴル国）の南ゴビ県の語り手であるマンガル（女性）氏は研

究者のインタビューに対して「ウリゲルを演唱するには年をとりすぎた」⁵と言われたという。ここでいう「ウリゲル」にはトゥーリの概念が含まれると思われる。

iii 薩仁格日勒によれば中国の青海・甘肅などのモンゴル人にはトゥーリ (tuuli) という名称が分からない。その人たちは叙事詩をトゥージ (tuuji) あるいはウリゲル (üliger) という。

iv 筆者の調査では、オイラト系に所属する内モンゴルのアラシャ・モンゴル人にはトゥーリ (tuuli) という名称は知られていない。物語の伝承を総体的にウリゲル (üliger) という。

以上から、トゥーリ概念に用いられる名称とウリゲル概念に用いられる名称は地域によって異なっていることがわかる。

I と II の表では一番上の行に研究者のジャンル分類の名称を置き、それに対応して縦の列に各地域で用いられるジャンル名称を並べた。この場合、I と II の地域をまとめてみれば、I のブリヤトと II のバイカル湖ブリヤトはトゥーリの概念にウリゲル (üliger) という名称を用いる。II のフルンブイル・ブリヤトは中国内モンゴルのフルンブイル盟に住んでいるブリヤトであり、トゥーリの概念にトゥーフ (teüke 歴史の意) という名称を用いる。I のカルムイクはトゥーリの概念にトゥーリという名称を用いる。それから、I と II のハルハはトゥーリの概念にトゥーリとウリゲル (或いはトゥージ) という名称を用いる。これに III の i と ii を加えて考えればおそらく名称の地域差だと考えられ、少なくともハルハではこの二つの名称を用いる。また、I の内モンゴルと II の新疆と III の青海・甘肅・アラシャ (iii・iv) は中国領内のモンゴル地域であり、トゥーリの概念にトゥーリという名称は用いられない。

さらに、I と II を合わせてウリゲル (üliger) の概念に注目すれば、そこに地域によってトゥーリ、トゥーリス、ウト・トゥーリマデなどの類似語が用いられていることが分かる。この中の、ウト・トゥーリマデという名称は「ウト (長い)」と「トゥーリマデ」という二語で構成される複合語である。そう考えれば、これらの名称の語幹はトゥーリであることは明らかである。すなわち、学術分類のウリゲル概念には、伝承者によって地域的にトゥーリという名称が用いられるが、トゥーリ概念にトゥーリという名称が用いられる地域は非常に少ない。

上記を踏まえて、モンゴル地域全体にわたってみれば北から順にバイカル湖ブリヤト・モンゴル国 (ハルハ)・内モンゴル・新疆・甘肅・青海などのモンゴル地域では、トゥーリの概念にジャンガルやウリゲル (トゥージ) という名称が用いられる。

3) ジャンガルについて

モンゴル口承文芸の中に、世界に知られている『ジャンガル』という英雄叙事詩があり、その研究はすでに 200 年余りの歴史をもつ。そのなかでももちろん、ジャンガルという語義の解明についてかなり深い研究がなされている。こうした先学の浩瀚な研究に敬意を払いながら、そのジャンル名称について考えてみたい。

⁵ ベ・ホロロ『モンゴル英雄叙事詩の伝統と特徴』81～86

すなわち、研究者レベルで理解されるジャンガルの概念⁶は語り手と聞き手といった伝承者レベルにおいてどのように理解されているかを検討したい。

ほとんどの研究者は、ジャンガルを主人公とする英雄叙事詩を『ジャンガル』と理解している。すなわち、研究者のレベルではジャンガルは一つの英雄叙事詩の題目として一般的に用いられている。しかし、『ジャンガル』研究を専門とするD.塔亜（新疆オイラトのトルグート出身）氏の研究に示されたように、モンゴル族の諸集団の分布地域によってジャンガルについての概念には、ずれが見られる。その分布地域で言えば、中国新疆でのジュンガル帝国の後裔およびオーロト（ögeled）氏族のなかでは「ジャンガル」を英雄叙事詩のジャンル名として認識され、内モンゴル・青海・モンゴル国・ブリヤト・トゥバなどでは一つの英雄叙事詩のタイトルとして扱われる。さらに、カルムイクおよび、新疆に回帰した一部のカルムイクの中ではジャンガルは物語的な口頭伝承として理解されている[D. 塔亜 2001: 3]。

これらの情報を踏まえて考えれば、ジャンガルという語は物語の内容をもつ口頭伝承の総称でもあれば、その中の一つのジャンル名でもあり、さらには、具体的な伝承の主人公の名前であり、同時にその題目にもなっている。

したがって、ここでトルグート氏族を中心とするヴォルガへ移動したカルムイクおよびオイラトの故地に戻った一部のカルムイクとオーロト（ögeled）氏族を中心とするジュンガル帝国の後裔とをそれぞれA集団・B集団と考え、それぞれのジャンガル概念をジャンガルAとジャンガルBにしてみよう。その他の地域の概念をジャンガルCにして、この三つの概念の示す範囲を図で示すと次のようになる。

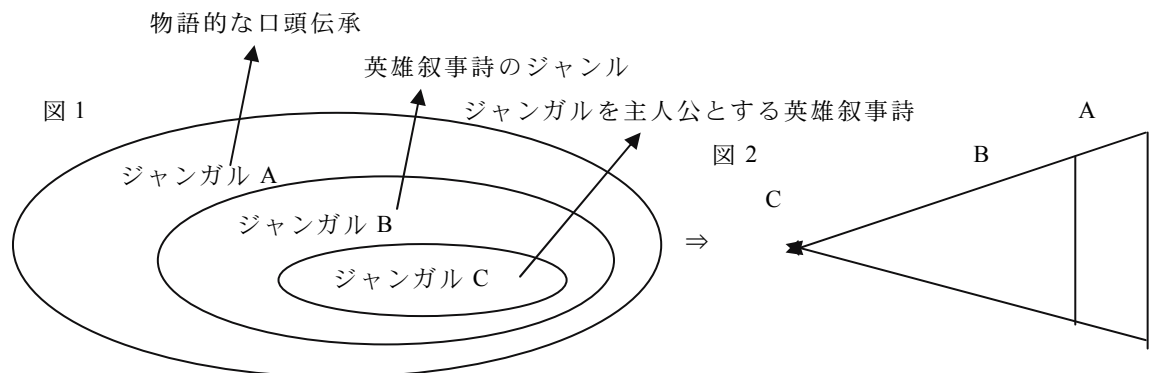


図1~2で分かるように、ジャンガルCの概念はより狭く、ジャンガルAの概念は最も広い。このジャンガルCの地域は内モンゴル・青海・モンゴル国・ブリヤト・トゥバなどであり、多様な集団によって構成されている。それに対して、ジャンガルAとBの地域はそれより狭く、構成上は一つの氏族を主とする比較的単純な集団である。そこで、『ジャンガル』の発祥地とされる中国領内のオイラトの故地[賈木查：2005]から考えれば、『ジャンガル』の流伝においてCの地域はAとBの地域より周辺のように思われる。もしそうだと考えるなら、ジャンガルの

⁶ ここではジャンガルという口承文芸の現象に対する各レベルの思考の意味で用いる。

概念は中心から周辺へ、より具体的なものへ集中されてきたように考えることができる(図2)。そこで、この概念変化の経緯に一筋の要素が見られる。それは、英雄叙事詩という概念である。すなわち、ジャンガル概念は英雄叙事詩『ジャンガル』に具体化された。

ここまでの分析に加えて、トゥーリの概念を包含するジャンガルという名称を含めて考えれば、モンゴル口承文芸の伝承者レベルでトゥーリ概念を示す名称はジャンガル、ウリゲル、トゥーリといった三つの語がある。

この三つの名称が示す最大の概念に注目してみよう。ジャンガルという概念においては、ジャンガルAは最も広範囲の概念であり、物語的な口頭伝承が包含される。それに対してⅢのivで筆者の調査から得た情報のように、ウリゲルは物語性をもつ口頭伝承の総称になる場合もある。トゥーリという名称はトゥーリ概念かウリゲルの概念のいずれかが当てはまり、比較的、狭い概念を示している。ジャンガルとウリゲルの名称はほぼ同じ概念を示しているが、地域範囲から考えるとジャンガルA概念は地域性を持ち、ウリゲル名称の方が範囲が広い。つまりモンゴル地域で広範囲にわたってウリゲル名称は物語性をもつ口頭伝承、すなわち叙事詩の概念をもつのである。

4. ウリゲル(üliger)と諸民族の口頭伝承

ここまで、モンゴル族の民間における伝承者によるウリゲルという名称を見てきた。民間伝承者のレベルでこの名称の概念には多様な伝承が含まれているが、その中で叙事詩は重要な存在である。このような多様性をもつモンゴル族のウリゲル(üliger)は北方民族の口頭伝承とどのように関連しているかを考えたい。

1) 叙事詩の類似点から

ユーラシアには多様な経済的基盤を持ち、異なる言語を操る多くの民族が広範囲に居住している。そのなかで、モンゴル族はユーラシア内陸で主に遊牧牧畜を営んでいる。

モンゴル族の立場からその周辺をおおざっぱに眺めれば、ユーラシアには、ウラル語系、チュルク語系、モンゴル語系、トゥングース・満洲語系、パレオ・アジア諸語という言語グループが存在する。このような多様な言語文化のなか、それぞれ固有の口承文芸のジャンルを有する。そのなかでも、ユーラシア諸民族の叙事詩は研究者の注目を集めている。

叙事詩はその背景によって神話的叙事詩と歴史的叙事詩と二つに分けられる。モンゴル族の最大の叙事詩である『ゲセル』と『ジャンガル』はそれぞれこの二つの種類に当てはまるではなかろうか。モンゴル叙事詩の『ハン・ハラングイ』もそのモチーフ・構造・主人公の描写などから見て神話と叙事詩の移行期に生まれた早期の叙事詩という[Narantuyay-a 2004: 131]。

『ゲセル』叙事詩では、主人公が人間世界の邪悪を退治するため、天降る天神のことが語られた(超自然的存在の崇拜)。これに対して、『ハン・ハラングイ』の叙事詩ではホルムスタ・テンゲリ(天)と対立して生まれた不思議な力をもつ英雄の業績が語られる。超自然的な存在を崇拜するかあるいはそれに対立するか、いずれにしても両者には、超自然的勢力の存在が明白である。この前二者に対し

て、第三者の『ジャンガル』叙事詩では人間社会のある君主およびその前後の世代の歴史的英雄の功績が語られる。

ベ・ホロロによれば「シャマニズムが盛んな時代に生まれた叙事詩（トゥーリ）の主人公は、後にテンゲリ・ホルムスタの勢力と対立する力の持ち主として入れ替えられた。超自然的力を信じる思想をもつ叙事詩は、正義のため戦う勇者の英雄叙事詩へ発展した」という[P.Qorloo 1985]。ここで叙事詩の発展順序の問題を別に考えることにして、このような主人公の性格の違いは『ゲセル』と『ジャンガル』について看取できる。

『ゲセル』では、主人公のゲセルが天上界から天降ったものであり、常に天上界の援助を受ける。ゲセルは地上でハーンになっても、彼の妻や部下が天界から遣わされ、ゲセルを庇護する。彼らは死んで生き返ることによって、天界と地上界の間を行ったり来たりする。ゲセル・ハーンの従兄であるジャサは最も信頼のおける部下であるが、敵に殺されてその魂がワシの胃袋に保存され、天界へ戻った。また、ゲセルが天界の援助を求めたとき、ジャサは天上界の妻を連れて天降った。このような天上界と地上界の関係は『ゲセル』では明白に描写される。

たとえば、このように人間世界が天上界の庇護のもとに動くような特徴は、パレオ・アジア系のアイヌ民族の叙事詩にもしばしば見られる。アイヌの『虎杖丸』では、主人公の動きに伴ってその憑き神も空を飛んだりして動く。また、戦いの際、天上界と地上界の動きは同時進行する。そこでは、憑き神の世界は常に地上世界の様子が観察できるように思われる。この点に関して、『ゲセル』にも類似点がある。ゲセルが危機に瀕したとき、三人の天上の姉は様子を鳥瞰して直ちに助けを送るが、このような神話的要素は中央アジアの叙事詩にかえて少ないと思われる。

『ジャンガル』の特徴は近隣の中央アジア・チュルク系諸民族の叙事詩を想起させる。たとえば、『マナス』では、はじめにマナスの先祖の名が系譜として並べられ、それからマナスは長らく子供に恵まれない勇士の家に誕生し、少年のころから駿馬とともに偉功を遂げ、妻の智慧や勇士たちの力添えによって彼の活躍が成り立つ[坂井 2002 : 50]。他の中央アジア・チュルク系叙事詩ではこのような特徴が共通し、その背景に他民族との争いのような歴史的経緯をもつので「歴史叙事詩」とも称される[坂井 2002 : 16]。『ジャンガル』にはこのような現実的な特徴が顕著であり、『ゲセル』と『ハン・ハラングイ』と比べて性格が異なる。

『ジャンガル』では最初に先祖の名が並べられて、次にウズン・アルダル・ハーンの結婚が語られ、ジャンガルはこの名門に誕生する。この点は、『マナス』に類似する。しかし、ジャンガルは2歳のときマングスに故郷が襲われ孤児になる。孤児のジャンガルは地神のナブタグ・サブタグ老夫婦に育てられ両親のことを知る。両親の仇討ちをして帰ると地神の老夫婦はいなくなる。このような「孤児が親の仇討ちをする」要素は中央アジアの叙事詩には少ない[大林 1991 : 349]。この点は、かえて、トゥングース系ナーナイ族の叙事詩において特徴的である[大林 1991 : 347～348]。

このように、英雄叙事詩『ジャンガル』は東西の諸民族の叙事詩を結び付ける

ような共通点を含み、膨大なバリエーションを有して今日に至る。そこで、ジャンガルという語の語義には、いくつかの解説があるが、そのなかでも「世界征服者」の意を持つペルシャ語に由来するという説が優勢である。この説に従えば、この伝承の性格は中央アジアの叙事詩とより近縁である。

2) ウリゲル (üliger) との関連から

東方のパレオ・アジア諸族から西のチュルク・モンゴル系語族にかけて口頭伝承の共通点が多く指摘されている。たとえば、モンゴル口承文芸の主人公に登場するバートルやエルやメルゲンという名称は、チュルク語系のカザフやカラカルパクやサハの英雄叙事詩、そしてトゥングース・満洲語系のナーナイ族・ウリチ族の叙事詩にも登場する。すなわち、モンゴル・チュルク系の叙事詩では主人公が「主人公の特徴 + バートル (エル) あるいはメルゲン」というような称号つきで登場する (「ドルジンハイ・バートル」のように)。これに対して、トゥングース・満洲語系のナーナイ族・ウリチ族の叙事詩では、バートルやエルよりむしろメルゲン (男性)、プジン (女性) の方が優勢であり、主人公は具体的な名がなく、一人のメルゲンといった形での登場が多いようである。

ところで、このトゥングース系ナーナイ族の口承文芸はこの東方西方の叙事詩の要素を含む点が注目を集めている。4の1)でもふれたように、このナーナイ族の口頭伝承はモンゴル族の英雄叙事詩『ジャンガル』にとどまらず、モンゴル系のウリゲル (üliger) との類似点も指摘できる。すなわち、モンゴル叙事詩研究者の仁欽道爾吉[2001: 56]によれば、ロシア領におけるブリヤトのウリゲル (üliger) には「女召使が姫を騙して代わりに勇者の嫁に行く」というモチーフが見られるが、中国領内のモンゴル族のウリゲル (üliger) にはそれが見られないという。だが、このモチーフはナーナイ族の民話には見られる⁷。これは、ブリヤトのウリゲル (üliger) とナーナイ族の口頭伝承との関係があることを示すに違いない。

また、荻原の研究によれば、アムール川流域のトゥングース系やパレオ・アジア系諸民族の口承文芸には主に三つ、大きなジャンルが知られている。それは次の表のようになる。ここでは A・B・C は異なるジャンルを示すが、ジャンル概念ははっきりしていないため、ジャンル名をつけないことにする。

ジャンル分類 民族	A	B	C
ニヴフ	nastund	tylgund	
ウイльта	nigma	teelugu	saxuli
ウリチ	ningma(n), ningmaka(n)	telungu	sekhor
ナーナイ	ningman	telungu	siokhor
オロチ	nimapu, nima, nimajpu	telmu~telunu	sokhor
ヴデゲ	nimanku	telungu, talunu	
ネギダル		talung, talum	ulguli

⁷ 風間伸次郎 採録 訳注 2005 年 『ナーナイの民話と伝説』 千葉大学文学部

ホジェン	nimakan	talung	shofuli
エヴェンキ	nimgakan		ulgur

こうした各民族の固有のジャンル名の中に、エヴェンキ族は英雄説話・世間話などを、ネギダル族は伝説を「ulgur」という[荻原 1996 : 42]。さらに筋が通れる話は、A ジャンルの名称で、基本的に「nima」という発音に類似する語である。B ジャンルの名称は基本的に「telun」という発音に近い。これらに対して、C ジャンルの名称は「siokhor」の類と「ulgur」の類に分かれたことが明らかである。

したがって、東西に広がった諸民族の口承文芸のジャンル名を見ると、ウリゲル（üliger）の名称と関わるものは、以下のようにあげられる。それは、南シベリアのチュルク系シオル族（山下 2001 : 57）ではなぞなぞを üliger sös という。中国の青海省のモンゴル人はなぞなぞを üliger という習慣がある（レ・ウスレングイ氏の 2006. 9. 12⁸の教示による）。モンゴル系のブリヤト族では叙事詩などを üliger という。ここで、興味深いことにウリゲルという名称には様々なジャンルがある。つまり、こうした類似の名称を拾ってウリゲル（üliger）という口頭伝承を考察すれば、そこにさまざまなジャンルがあることに気づく。まさに、アラシャ・モンゴル口承文芸のウリゲル（üliger）に現れた現象と同様の多彩さが見られる。その中でも、トゥングース系の民族に見られた、ウリゲルのジャンルと類似点が少なくないと思われる。

このようなジャンルの多様性を見せるウリゲル（üliger）の名称はただ語源を辿るだけでは、解明できないであろう。そこで諸民族におけるウリゲル（üliger）という口承文芸はどのようなジャンルの概念であるか、それらはどのように重なるかということは注目に値する。したがって、東西でつながった諸民族のウリゲル（üliger）の中に叙事詩のジャンルが存在すること、ひいては叙事詩自体に類似点が見られることは示唆に富む。

結びに

モンゴル族のユーラシアを股にかけた歴史的な活動は壮大であり、その際に諸集団や民族と深い接触があった。そうした諸集団や民族の相互関連の中で口頭伝承が浸透し合うことは想像に難くない。

さらに、モンゴル族の多種の下位集団の間でも再構成が繰り返されてきた。そのため、一言でモンゴル口承文芸の全体を概説することは難しいと思う。アラシャ・モンゴルの先祖は歴史上、東方にあるモンゴル族の中心部に源をもち、後に西モンゴルに編成された経緯がある。そして東西に遠距離の移動も経験したのである。こうした集団の長い歴史を考慮に入れ、その人たちの口から口承文芸を採集して、それを分析した結果はこれまでのモンゴル口承文芸で充分検討されなかったウリゲルのジャンルに関する問題を提起した。

口承文芸には民族の生活環境という広大な背景、またそこから生まれた文化や物事の考え方が綴られている。その一方、こうした口頭伝承は民族本来の固有の

⁸ 青海省の口承文芸研究者。

言葉で綴られるものである。このような伝承は伝承者に語り継がれるうちに、そのものに対する認識や、それを表す名称が育成されたのであろう。こうした伝承は生活空間をともにする異言語集団の間でも無条件に広がることが充分可能である。このことは多くの学者の研究によっても裏付けられる。モンゴル口承文芸のウリゲルの伝承、そしてユーラシア諸民族に点在するウリゲルの現象はその一つの事例だと考えられる。

また、モンゴル族のウリゲルに叙事詩のジャンルが存在することは示唆的である。したがって、一般的に、ユーラシア地域に広がる諸民族に叙事詩が見られる中で、モンゴル族の『ゲセル』と『ジャンガル』にはそれぞれ東部と西部の特徴が見られることは注目すべきである。今後もこれについての詳細な検討は、モンゴルのウリゲルの考究に非常に有効である。

モンゴル民族を含めて諸民族の伝承の内容、そして、伝承者自らこの内容の伝承をどのような名称で呼んでいるか、どのように語り継いでいるかは口承文芸研究、ひいては諸民族のその比較研究の重要な関心事の一つだと考えられる。

(すちん 社会文化科学研究科博士後期課程)

参考文献

1. 日本語の文献

- ベ・ウラジミルツォフ (宮崎真道訳) 1938「蒙古・オイラート英雄史詩 序」『善隣協会調査月報 69～71』善隣協会
- 大林太良、1993『北方の民族と文化』 山川出版社
- 荻原真子、1995『東北アジアの神話・伝説』 東方書店
- 1996『北方諸民族の世界観』 草風社
- 2003 「テナントムワン＝クイキニャーク＝大ワタリガラス？ーコリャク神話研究の再検討 (1 Tenanto'mwan の説話 (I-a)『ユーラシア言語文化論集』第6号
- 上村 明、1990「ハルハ英雄叙事詩のプロット構造複雑化について」『日本モンゴル学会紀要 21』日本モンゴル学会
- 風間 伸次郎 採録・訳注 2005『ナーナイの民話と伝説 8』千葉大学文学部
- 萱野茂、1998『萱野茂のアイヌ神話集成』 (第1巻 第8巻) 平凡社
- 川田順造、2001『口頭伝承論』平凡社
- 川田順造・山本吉左右 昭和 61 年『口頭伝承の比較研究』弘文堂
- 久保寺逸彦 (編訳) 2004 年『アイヌ神話』草風館
- D.塔亜、1999『アリンピルの「ジャンガル」ー新疆オイラト・モンゴルの英雄叙事詩』千葉大学ユーラシア言語文化論講座
- 2001 「新疆ジャンガルチ研究」博士学位論文
- 中川 裕、1997『アイヌの物語世界』 平凡社
- 原山 煌、1995『モンゴルの神話・伝説』東方書店

2. モンゴル語文献

- A.Tümen (nairayulaysan) (A. トゥメン) 1999《Mongyol-un obuy aimay neikem-un baiyulul-un

- neres-un tailburi》öbör mongγol-un arad-un keblel-koriy-a
ö.Ĵaydursurung（オ・ジャガダルスロン）1986《Ĵiangγar-un sudulul-un tuqai 》 öbör mongγol-un
neigem-iyn sinĵilekü uqayan
Narantuyay-a（ナラントヤ）2004《Mongγol tuuli-iyn aman-ba bičimel qubilburi-iyn sitülčege》
ündüsüten-u keblel-un qoriy-a
Burĵigin Dorgi（ボルヂギン・ドルギ）2002《Alaša qošod》öbör mongγol-un soyol-un keblel-koriy-a
B.Damirinĵab（B.ダミリンジャブ）1982《šinĵiang-un mongγol bayatur-un üliger-un tuqai
ügülekü-ni》öbör mongγol-un neigem-yin sinĵilekü uqayan
Boduqai（ボドハイ）1986《Mongγol bayaturliĵ tuuli-iyn teükečilegsen üy-e töröl 》 öbör
mongγol-un neigem-iyn sinĵilekü uqayan 1 duger
P.Qorloo（ベ・ホロロ）1985《Mongγol arad-iyn bayaturliĵ tuuli-yin ulamĵilal-ba ončaliĵ》öbör
mongγol-un neigem-yin sinĵilekü uqayan
Qasumi qiroo（蓮見 治雄）1999《〈Mongγol-un niyuča tobčiyan-u〉 aman ĵokiyal sudulul》öbör
mongγol-un soyol-un keblel-koriy-a
Gereletu.T.Namĵil 1988《Ĵangγar I 》öbör mongγol-un arad-un keblel-koriy-a
Ĵamsürung-un Čewang（ジャムスルン・ツェワン）1966《Mongγol arad-un bayaturliĵ tuuli-in
učir 》ulayanbayatur
Ĵa.Čilaγu 1989《Mongγol arad-un bayaturliĵ tuuli》öbör mongγol-un suryan kümüĵil-un keblel-un
qoriy-a《oirad mongγol-un tobči teüke》-yi nairayulqu duyuilan 2000《oirad
mongγol-un tobči teüke》sinĵiyang-un arad-un keblel-koriy-a
Mongγol tulγur bičig-un čobural 1982《Abai geser》öbör mongγol-un arad-un keblel-qoriy-a
《geser-un čobural bičig》1985《Buriyad < geser > 》öbör mongγol-un neigem-iyn sinĵilekü
uqayan
Liu ĵin suwe（留金鎖）1985《Mongγol ündüsüten-u tobči teüke 》öbör mongγol-un arad-un
keblel-qoriy-a

3. 中国語文献

- 薩仁格日勒（sarangerel）2001《蒙古史詩生成論》中央民族大学出版社
賈木查（T.Ĵamča）2005《史詩〈江格爾〉》新疆大学出版社
仁欽道爾吉（Rinčindorĵi）2001《蒙古英雄史詩源流》内蒙古大学出版社